



TIEPh

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

TIEPh



Newsletter No. 10 2010. 7

「エコ・フィロソフィ」の構築に向けて

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）

山田 利明



東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）は、2006年に東京大学を中心とするサステナビリティ学連携研究機構（IR3S）の協力機関として発足した。

IR3Sは、文部科学省の科学技術振興調整費によって運営され、新しい学的領域の構築に大きく貢献してきたが、本年3月をもって同調整費の交付が終了し、参画した大学や研究機関は、それぞれに従来の研究を促進・発展させて、サステナビリティ学の確立を目指すことになった。これにより、TIEPhも学内研究機関として、新たな出発を図ることになったのである。

この4年間のTIEPhの活動を省みたとき、本学にはなかった新たな哲学的展開を提示し得たことの意義は大きい。ことに

第1ユニットの古典文献学をエコロジーに反映させ、それを実践的論理として再構築しようとする試み、第2ユニットの環境意識にもとづく行動理論の解明や、第3ユニットの環境哲学の具現化としての環境デザインのあり方の探求など、哲学研究の可能性を示したものといえる。

実はTIEPhが掲げた「エコ・フィロソフィ」の構築は、東洋思想にもとづく新しい価値観の創生にあった。近代西欧の価値観が、今日の環境状況を生み出したという認識のもとに、それに代わるべき価値観を、東洋の思想の中に求めようとしたのである。それは特に西欧にはない独自の自然観を探究して、自然との共生や自然との融合を現代の眼から考えようとすることであって、西欧の文明の否定でもなければ現代の攘夷論でもない。ただ価値観を転換しなければ、やがて取り返しのつかない事態に襲われる。もちろん人類は、現在の文明を捨てて300年前の生活に戻ることはできない。しかし例えばそう遠くない将来、石油は必ず枯渇する。そのとき人類は、石油文明にもとづく現在のシステムとは別のシステムへの移行を余儀なくされる。例えば食糧問題や民族問題についても、その解決を図るのであれば、いずれ地球規模のシステムを変えねばなるまい。徐々にであれ急劇にであれ、システムは代わる。そのシステムの基盤になるのが価値観であり哲学である。それをわれわれは、「エコ・フィロソフィ」と名付けた。

したがって、「エコ・フィロソフィ」は、きわめて多面的でありまた多岐にわたる領域を持つ。人の生き方から社会規範、地域、民族、国家、地球など、人類のあらゆる生存基盤が含まれる。その意味では、従来の哲学という領域にはおさまらない総合学であると考えている。

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）は、自然観探究ユニット、価値観・行動ユニット、環境デザインユニットから構成され、さまざまな研究活動、シンポジウム、研究会を企画・運営しています。

今回のニュースレターでは、2010年度の活動報告、及び活動予定を掲載します。詳細につきましては、TIEPhホームページ（<http://tieph.toyo.ac.jp/home.html>）をご参照ください。

第1ユニット

「自然観探究ユニット」の課題

竹村 牧男



我々がライフスタイルを改革・実践していくには、その人にとっての確たる思想が自覚されていることが重要であろう。その思想は、決して借り物ではない、真に自分自身の存在の根底から築きあげられたものでなければならないに違いない。単に西洋は行き詰まっている、東洋は可能性があるという、表層的な印象による気分のみでなく、日々、自己が生活し呼吸している場を形成している社会・文化の深層にあるものを汲み上げて、現代社会の課題に取り組むべきであろう。そういう立場に立って、我々は東洋の自然観、日本の自然観の核心にあるものを掘り下げたいと思うのである。

科学者の中には、近年の温暖化等々の影響によって、実はこの地球世界はもう50年いや30年も持たないと、真剣に警告している方もいる。事態はまことに深刻であり、今やサステナビリティを追求する実践が急務であることも、きっと間違いないことであろう。未来世代のいのちあるものの身のうえを思うとき、できるかぎりの実践を行わずにはいられない。また、できるかぎり社会の仕組みの改革に、関与していくべきであろう。政策への意思表示のほかにも、たとえば、リサイクル・システムへの協力や、フェアトレード運動への参画など、考慮すべきことは多い。

と同時に、自己と自然環境のあり方、自己と他者のあり方、について、深い洞察を獲得し、人々と共有していくことも、問題解決への道を根底において支えることになるであろう。それは短期的な効果は希薄かもしれないが、長期的にはぜひとも必要なことである。とりわけサステナビリティのことを想うとき、未来の見知らぬ他者との関係をどのように自覚するかが課題となる。このような問題を、今はやりの言葉でいえば、可視化していくことが必要である。自然観の探究の視点にも、そうした観点を導入しての、意欲的な研究が重要だと思うのである。

第2ユニット

「価値観・行動ユニット」の研究目標について

大島 尚

TIEPhでは、2007年から2008年にかけて、第2ユニットが中心となり、シンガポール、中国、ベトナム、日本において環境に関する価値観調査を実施しました。調査結果からは、自然観、生活観、科学観などに地域差があり、それらが環境保護の意識と関連していることが明らかとなりました。また、西洋諸国を対象とした同種の調査との比較から、東洋と西洋の間の価値観の文化差も示されました。このような、価値観の地域差や文化差が、環境配慮の意識や行動にどのような影響を及ぼしているのかを知ることが、第2ユニットの研究テーマのひとつです。今後も経済発展の著しいアジア諸国を中心に調査研究を継続し、人々の価値観という側面から「エコ・フィロソフィ」についての考察を進めていきたいと考えています。

一方、社会心理学の観点からは、環境問題は社会的ジレンマの事例としてとらえることができます。社会的ジレンマとは、個人の利益と社会の利益とが両立しない状況を指し、個人個人がそれぞれに自分の利益を追求すると社会全体として不利益が生じるというものです。社会的ジレンマは解決が難しい問題として知られており、環境問題においても個人が快適で便利な生活ばかりを求めるのではなく、地球社会や未来社会の利益のために行動するようになる条件が模索されています。第2ユニットでは、集団やコミュニティにおける社会的な人間関係の視点から、解決策を探る研究を積み重ねています。

環境に配慮した行動を取るための条件を個人のレベルで見えてみると、行動することの重要性はわかっている、実際に行動には移せないという状況が明らかとなります。このような認識と行動の不一致はさまざまな場面で見られ、社会心理学の基本的な研究テーマのひとつとなっています。そこで、環境配慮行動に影響を及ぼす社会的な要因を明らかにし、行動を促す具体的な方策を提言することも、第2ユニットの研究目標のひとつです。特に、社会的な規範意識の形成や、広告や説得などのコミュニケーションの効果を調べる研究が進められています。

社会心理学は、現実社会のさまざまな問題を扱っていますが、環境問題に関する研究は、その社会的な重要性の割にはまだ十分な広がりを見せていません。TIEPhの第2ユニットは、この分野の社会心理学的研究を推進する拠点となるべく積極的に活動を進めていきたいと考えています。



河本 英夫



環境デザインの課題は、環境設計をアイデアとして企画し、現実の環境問題に対して、より多くの選択肢を提示していくことである。現在の環境問題への対応は、それほど多くの選択肢の中から選択がなされているわけではない。それらの多くは、現実の行動を抑制する方向で課題設定されることが多い。二酸化炭素を出さないように、つつまじやかで、禁欲的な生活のモードを模索するというような、いわば生活態度の規制を目指すものも多い。エレベータに乗るよりも、できるだけ階段を歩こうというスローガンは、個々人の倫理的態度に訴える以上、少し無理がきている。むしろエレベータに乗るよりも、階段を上った方が面白く、その階段を登れば、いくつもの経験ができるような階段を設計してしまうことに力点を置くのが、環境デザインの課題である。そこには身近な小さなアイデアから、都市設計にいたるまで、さまざまなレベルの課題がある。たとえば歩行者の集中するエスカレータを降りた直後の通路には、発電板を設置して、歩行頻度がおのずと自家発電につながる

ような工夫である。

こうした課題設定が目指すのは、現実の生活において、個々人ごと、あるいは個々人間の選択肢を増やすことである。江戸時代のように物質循環の範囲で生活をしようと希望するものには、そうした選択が可能となり、ニューヨークのような生活を送りたいものにはそうした選択が可能となるような、多重回路網の設定である。こうしたなかで個々人は、みずから工夫しながら、生活することができるような設計である。こうした工夫をつうじた個々人のライフ・デザインは、その人のセルフ・デザインであると同時に、間接的に環境問題に寄与するような設計を行うことになる。素材は過去のアジアの智慧にも、最先端の科学技術にも広く分布している。必要とされるのは、選択肢に満ちた工夫である。

<2009 年度 TIEPh 活動報告>

4月～7月

「全学総合」講義として、「エコ・フィロソフィ入門」を開講

5月8日

TIEPh 講演会

「サステナビリティの教育について ―オーストラリアの現状から―

講師：ジュリー・マシューズ

於：東洋大学 白山キャンパス スカイホール

5月16日

TIEPh 学内ワークショップ

テーマ「環境デザイン」

質問者：武内和彦

於：東洋大学 白山キャンパス 6号館 第3会議室

9月12日～13日

第1ユニット：日本宗教学会パネル参加

「宗教とエコ・フィロソフィ」

於：京都大学

9月19日

TIEPh 国際シンポジウム

「環境哲学の可能性～環境問題の解決に向けて～」

於：東洋大学 白山キャンパス 6号館 6309教室

10月10日

ICAS/TIEPh 共催 国際セミナー

「持続可能な発展と自然・人間 ―西洋と東洋の対話から新しい

エコ・フィロソフィを求めて―

於：東洋大学 白山キャンパス スカイホール

11月28日

TIEPh 国際シンポジウム

「日本発のエコ・フィロソフィを求めて」

後援：読売新聞東京本社 東洋大学共生思想研究センター

於：東洋大学 白山キャンパス 井上円了ホール

12月

『哲学者インタビュー集』刊行

1月

『「エコ・フィロソフィ」分析データ集』刊行

1月26日

『「エコ・フィロソフィ」入門

―サステナブルな知と行為の創出―

ノンブル社より刊行

3月

『「エコ・フィロソフィ」研究』Vol.4 刊行

『「エコ・フィロソフィ」研究』Vol.4別冊 刊行

3月1日

TIEPh 活動報告会

於：東洋大学 白山キャンパス 6号館 6306教室

3月24日

第3ユニット活動報告会

テーマ「環境と生活の哲学」

講師：ゲオルク・シュテンガー

於：東洋大学 白山キャンパス 3号館 第2会議室

<今後の活動予定>

今後の活動の詳細は、随時 HP (<http://tieph.toyo.ac.jp/>) でアップします。

Toshiaki YAMADA	Professor, Environment Design Unit Project Representative	山田 利明 代表（センター長） 環境デザインユニット
Takashi OHSHIMA	Professor, Values and Behavior Unit	大島 尚 価値観・行動ユニット
Hideo KAWAMOTO	Professor, Environment Design Unit	河本 英夫 環境デザインユニット
Makio TAKEMURA	Professor, Nature Unit	竹村 牧男 自然観探究ユニット
Kohei YOSHIDA	Professor, Nature Unit	吉田 公平 自然観探究ユニット
Ichiro YAMAGUCHI	Professor, Nature Unit	山口 一郎 自然観探究ユニット
Shin NAGAI	Professor, Nature Unit	永井 晋 自然観探究ユニット
Tahoko SAKAI	Lecturer, Nature Unit	坂井 多穂子 自然観探究ユニット
Kiyoshi ANDO	Professor, Values and Behavior Unit	安藤 清志 価値観・行動ユニット
Yoshiaki IMAI	Professor, Values and Behavior Unit	今井 芳昭 価値観・行動ユニット
Hideya KITAMURA	Professor, Values and Behavior Unit	北村 英哉 価値観・行動ユニット
Naoya SEKIYA	Associate Professor, Values and Behavior Unit	関谷 直也 価値観・行動ユニット
Satoshi INAGAKI	Assistant Professor, Environment Design Unit	稲垣 諭 環境デザインユニット
Ayano TANAKA	Research Fellow	田中 綾乃 特別研究員
Rina YOKOUCHI	Research Fellow	横打 理奈 特別研究員
Yoko YAMAMURA(SEKI)	Research Associate	山村(関) 陽子 研究助手
Kazunari HATA	Project Research Assistant (PRA)	畑 一成 プロジェクトアシスタント
Erika HIGASHIGAKI	Project Research Assistant (PRA)	東垣 絵里香 プロジェクトアシスタント
Shinji MUTO	Project Research Assistant (PRA)	武藤 伸司 プロジェクトアシスタント

<TIEPh 事務局から>

2010年5月に、研究助手として山村陽子が就任し、事務局も新体制となってスタートいたしました。

これまでの4年間の経験をふまえて、TIEPhがこれからも社会において大きな役割を担ってゆけるように、ひいては人と地球環境との「持続可能」な関わりを構築してゆくために、「エコ・フィロソフィ」の学術の発展に力を尽くしてゆきたいと思います。

写真：事務局メンバー（左から 東垣、畑、山村、武藤）



ニュースレター第10号 平成22年7月発行

編集 東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ (TIEPh)

住所：東京都文京区白山5丁目28-20 6号館4F 60458室 Tel & Fax：03-3945-7534

E-mail：ml.tieph-office@ml.toyonet.toyo.ac.jp Homepage：http://tieph.toyo.ac.jp/